

「まかせてぞみる」の系譜

— 隠遁的行為と措辞 —

稲田 利徳

「まかせてぞみる」系列の措辞を有する和歌の発想は、当初は、多様な様相を呈していた。けれども「後拾遺集」時代の歌人を経て、やがて「堀河百首」の頃になると、この措辞に作中人物の隠遁的行為や精神を潜在させた歌が登場するようになる。本稿では、「まかせてぞみる」系列の措辞を取り込んだ歌の発想を分析し、やがてそこに隠遁的行為や心情を付与するまでの系譜を跡付けてみた。

Keywords : 隠遁・和歌・措辞・自然・系譜

一

京都は四条通りの西端の地、桂川をはさんで松尾と対する梅津は風光明媚な田園で、そこに平安時代頃から貴族達の山荘が営まれた。

和琴歌の名手で、かつ歌人でもあった源師賢の山荘も梅津にあり、そこが詩歌管絃の交友の場となっていた。

「後拾遺集」には「師賢朝臣梅津の山庄にて田家秋風といふころをよめる」の詞書で、源頼家の、

やどちかき山だのひたにてもかけでふく秋風にまかせてぞみる¹⁾

(秋上・三六九)

の歌が入集する。この歌会に当代の歌壇をリードしていた源経信が参加していたことは、「経信集」に、

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて、田家秋風といへる事をよめる

夕されば門田のいなば音づれて芦の丸やに秋風ぞふく²⁾(五五)

とみえることで確認できる(この歌は「金葉集」にも入集)。

おそろく、ある年の秋の頃、師賢主催の梅津の山荘での歌会に、経信・頼家などをはじめとする歌人達が集い、その場と季節に相應しい「田家秋風」の歌題詠を提出し、静寂な環境のなかで、心に染みる風流韻事の時を過したであ

ろう。

ところで、この歌会での歌題「田家秋風」の「田家^{でんか}」とは、田舎、田園にある住居の意で、漢詩では屏風の題画詩として、早くこの題が見え、「和漢朗詠集」(巻下)にも「田家」の項のもとに漢詩四篇と和歌三首が掲載される。が、和歌の歌題としては、先の師賢の山荘歌会の「田家秋風」などが早い例で、以後「田家」の結題は、「山家」題とともに盛んに登場してくる。

さて、ここで問題にしたいのは、頼家歌の末句の「まかせてぞみる」という措辞だが、それに先立ち、この歌の作中人物とその心のありように触れておきたい。

頼家の和歌は、住居に近い山田には秋風が吹き過ぎていたので、引板に手もかけないで、ただ秋風がそれを鳴らすのに任せている状態を詠じているが、「まかせてぞみる」作中主体はどのような人物として形象化されているのであろうか。

岡山大学教育学部国語教育講座 七〇〇—八五三〇 岡山市津島中三—一
Genealogy of "Makasetezomiru"

Toshinori INADA

Department of Japanese Language Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

この歌は歌題詠であるから、詠歌主体（頼家）＝作中主体でなくともよい。また、作中人物は、稲田に近づく鳥や鹿などを追い払うための「引板」を引き鳴らす役目に就いている田守であると、一応想定される。作者頼家は田守の立場になり代って詠じたとみるのである。

けれども、この歌の場合、詞書や歌会の場合を考慮すると、作中人物を田守とみるのは相応しくなく、師賢の山荘での囑目の光景を題詠形式に仕立てることを試みたものとも考えられる。久保田淳氏はこの立場であり、「山田の引板は半ば山荘の興趣を添えるために設けられたようなもの」とするが、この見方が適切とみるべきかもしれない。そのとき作中人物は、山田の近くの山荘に住む主人という設定となり、山荘の近くにある山田の引板が手もかけないのに秋風に吹かれるままに鳴っている光景を眺望していることになる。

この作中人物の二つの想定は、「まかせてぞみる」の「みる」の理解ともかわつてくる。即ち、新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』（久保田淳・平田喜信校注）のように「引板の音を『聞く』のではなく、秋風の吹きつるさまを『見る』詠者の姿勢を歌う」のように「見る」とみて、視覚的な意味を強調する立場と、「秋風がそれをならすのにまかせていることだ」と「試みる」意とする立場に別れる。

そのことはともかく、作者頼家は、この作中人物をどのような精神の持主として造型しているのだろうか。あるいは、そういった作中人物の心のありようには無関心で、山田には秋風が吹いて引板を鳴らしているので、それに任せたままにし、手をかける必要もないという、一種の因果関係に興味を催して詠歌しているだけであろうか。

この「まかせてぞみる」の措辞に対し、『後拾遺和歌集新釈 上巻』（犬養廉・平野由紀子・いさら会著）では、次のような説明を加えている。

自分では手を出さず自然の現象に任せてみるという意。引板は人間がひくもなので、ここではそれを秋風にまかせてみると言っているのである。このような詠みぶりは『兼盛集』の「こぬ人をよびにはやらす我がやどはまねく尾花にまかせてぞみる」（二八六）あたりから盛んに詠まれるようになった。

確かに「ふく秋風にまかせてぞみる」と、ことさらに「まさせる」立場を強調する表現、そこには、本来人間が手で引く引板を、折よく吹いてきた秋風に任せ、人為的な行為を選びとらず、敢えて自然の現象に任せるという、作中人物の精神の一面が背景にあるように思われる。作者頼家は、自身に内在する、

ある種の心のありようを、作中人物に付与しているとみたいのである。

『後拾遺集』には、梅津の山荘の主人である師賢の次の歌が入集する。

船中月といふ心をよみ侍ける
みなれざをとらでぞくだすたかせぶね月のひかりのさすにまかせて
（雑一・八三五）

この歌は第五句が「まかせてぞみる」ではないが、川を漕ぎ下るのに使用する水刷れ棹を取ることもなく、月光の射すのに任せて高瀬舟を進めて行くという状況を詠じた点で、先の頼家歌と発想及び表現が類似する。この歌は、まずは「さす」に「射す」と「棹を」挿すを掛詞にしたところに興じているが、単にそれだけではなく、舟の棹を取る作中人物の心も背後に込められている。即ち、棹を敢えて取らなかつたのは、川面に美しく照る月光を乱したくなかつたという思惑による。北村季吟が「月のさすを、舟さすにそへて月に乗じて、竿もとらざるさま、優なるにや」（八代集抄）と評しているのは、その辺を鋭く読み解いている。作者師賢は、作中人物に風雅な心をも映し出そうと企図している。これは同じ歌仲間詠歌として、頼家歌の理解に有益な示唆を与える。

頼家は和歌六人党の一人であつたが、『後拾遺集』入集歌にも、
禅林寺に人人まかりて山家秋晚といふ心をよみはべりける
くれゆけばあさぢがはらのむしのねもをのへのしかもこゑたてつなり

（秋上・二八一）

（道雅三位の八条のいへのさうじに山ざとのゆきのあしたまらうどかどに
あるところをよめる）

山ざとはゆきこそふかくなりにつれとはでもとしのくれにけるかな

（冬・四二二）

のように、歌題詠や障子絵の画中の人物の立場ではあるが、山家、閑居の風情を詠じた歌があり、そこに彼の田園趣味、隠逸思慕も汲みとることができると同時にそれは、六人党をはじめ、当代の風流歌人達の共通した精神的な基盤をなすものでもあつた。

これらの歌や先の師賢歌も絡め、改めて冒頭にかかげた頼家の歌を味読するとき、人為的な行為を排し、自然の現象に任せたままに眺めるといふ作中人物の心のありよう、いわば都の喧騒を逃れ、山里や田園に住居を構え、心ゆくまで自然のなかに融和しようとする隠逸志向も透視されてくるのではなからうか。現に先掲の、同時詠の経信歌も、作中主体を山里の粗末な「芦の丸屋」に

住ませ、蕭条たる秋風に聞き入っている人物に仕立てられているのも傍証となろう。

これは、たとえ作中人物を田守とする見方に立つ場合でも、的はずれではなからう。なぜなら、遁世者の先達として著名な玄賓僧都には、

山田もる僧都の身こそあはれなれ秋はてぬれば問ふ人もなし

此れも、彼の玄敏の歌と申し侍り。雲風の如くさすらへ行きければ、田など守る時も有りけるにこそ。(発心集)⁷⁾

という伝承も存するからである。

さて頼家の歌は発想も奇抜、「まかせてぞみる」の措辞も印象深いこともあって、これ以降の歌人にも影響を与えている。

鳥羽殿にて、山家秋の心を

あきくればあさけのかぜのともさむみやまだのひたをまかせてぞまきく

(江帥集・八三)

この匡房の歌は「新古今集」(秋下・四五五)にも採歌されて著名なものだが、明らかに頼家歌を模倣している。ただし、引板に手をかけないで風に任せて聞くのは、朝風が寒いからだ、その理由を明示している点が相違する。こうなると作中人物は、山田を守る賤の身となり、労働の辛苦のさまが表面化し、そこに作中人物の隠逸的な行為としての心は稀薄になっている。さらに、

五月雨の心をよめる

さみだれはをだのみなくちてもかけでみづのころにまかせてぞ見る

(金葉集・夏・左兵衛督実能・一三九)

の歌も、山田の引板の場面ではないが、「てもかけで」と「まかせてぞ見る」の措辞の一致からみて、頼家歌の影響下にあるとみなしてよい。けれどもこの歌は、「みなくち(水口)」の縁で「まかせて」に水を「引き入れる」意をきかせて変奏している。

また、実家の、

田家秋風

かせそよぐをだのかりいほをきてみればひかぬなるこにとりもたつめり

(実家集・一〇四)

の歌も、鳴子を引かないのに鳥が飛び立つのは、秋風が引板を鳴らしている背景があり、「田家秋風」の歌題も一致するなど、頼家歌をどこかで意識しているだろう。

頼家歌はさらに下って、次の新古今時代の歌人にも受容されている。

(和歌所歌合に、田家月を)

いなば吹く風にまかせてすむいは月ぞまことにもりあかしける

(新古今集・秋上・皇太后宮大夫俊成女・四二八)

この歌は従来、例えば「稲葉を吹き渡る風に、吹き放題に荒らさせて住んでい

る番小屋は、人は眠っているが、月が漏り込んで、一晩中真に稲田の番をして

いるよ」と解釈されてきた。これは「もりあかしけれ」の「もり」に「漏り」と「守り」を掛けたところに趣向がある。

ところが、「まことに」の句には「本当に」とともに、伊勢大輔の「あきの

よは山だのいほにいなづまのひかりのみこそもりあかしけれ」(後拾遺集・秋

下・三六八)を暗に承けているとの見解が提出された。

さらに近年刊行の新日本古典文学大系『新古今和歌集』(田中裕・赤瀬信吾

校注)は、「まことに」は伊勢大輔の歌を踏まえると積極的に受け入れ、「風に

まかせて」も「引板を吹き鳴らすままにして」とらえ、「稲葉をわたる風に引

板をあずけて泊っている庵では、主の代りに月が古人も詠んだ通りに夜通し漏

れ入り、田守を勤めていることだ」と、従前とはかなり相違した解釈を示して

いる。

確かに俊成女の歌に「引板」は出てこないで、表現の次元では「風にまか

せて」や「まことに」は従来の理解でよいであろう。けれども作者は、やはり

「後拾遺集」で並んで入集している伊勢大輔歌と頼家歌とを背後に絡め、歌に

興行きを与えることを企図していたのではなからうか。

以上辿ってきたように、頼家歌の発想は、それに続く歌人達にも鮮烈な印象

をもって受容されていたこと、さらに「まかせてぞみる」という措辞の醸し出

す雰囲気も、それに一役かっていたとみなされる。

二

これまで、

やどちかき山だのひたにてもかけでふく秋風にまかせてぞみる

(後拾遺集・秋上・三六九)

という頼家歌の発想や「まかせてぞみる」という措辞に着目し、そこには作中人物の、都の喧騒を逃れて山里や田園の自然に融和しようとする心も込められていること、それは同時代の田園趣味や隠逸志向とも脈絡をもつてくることを

論じ、さらに頼家歌の影響の跡を追ってきた。

ここでは、これを前提に、「まかせてぞみる」の措辞の系譜、あるいはその用法・発想の様相といったものを探ってゆきたいが、それに先立ち、「まかせてぞみる」の「まかす(任す)」の語が、和歌にどのように使用されているか、その一端を素描することから始めたい。

「万葉集」には「まかす」という語が単独で使用された和歌は一首もみえない。三代集になっても、まだ「まかせてぞみる」の措辞を取り込んだ歌は出現しないが、「任す」は「古今集」に三首、「後撰集」に七首、「拾遺集」に五首と、あわせて十五首見出される。

それらを、何に「任せる」のかという視点から分析すると、一つの類型があり、「風に任せる」発想が一番多い。

今よりは風にまかせむ桜花ちるこのもとに君とまりけり

(後撰集・春下・よみ人しらず・一〇五)

おほぞらにおほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ

(後撰集・春中・よみ人しらず・六四)

うしろめたいかでかへらん山ざくらあかぬほひを風にまかせて

(拾遺集・雑春・よみ人しらず・一〇五三)

もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり

(古今集・哀傷・大江千里・八五九)

このように、桜や紅葉といった美的な対象を吹き散らす風に任すか任さぬかといった発想をとる。さらに風に任す対象は、桜や紅葉だけでなく、

吹く風にまかす舟や秋のよの月のうへよりけふはこくらん

(後撰集・秋下・よみ人しらず・四二七)

鶯のすはうごけどもぬしもなし風にまかせていづちいぬらん

(拾遺集・物名・輔相・三七四)

あさまだきふきくる風にまかすればかたよりしけりあをやぎのいと

(金葉集・春・春宮大夫公実・二四)

と、舟・鶯・柳の糸といったものにも拡大し、やがて先掲した頼家・匡房の歌のように引板を風に任せてみる発想と関連をもってくる。

次には「まかす」を掛詞・縁語として使用、それを趣向に据えた歌が散在する。

春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくるころかな

(拾遺集・春・斎宮内侍・四七)

この歌は「和漢朗詠集」の「田家」の項に掲載されてもいる。「まかす」に「任す」とともに、「春の田」の縁語で、種を「蒔かす」、あるいは田に「水を引く」意を掛け、さらに「つくる」に「付くる」と「作る」を掛ける。田作りは他人に任せ、専ら桜の花に夢中になる風雅な人を描いている。

(拾遺集・春・在原元方・四六)

この歌も「山田」との関連で、「まかす」に「水を引く」意を縁語とする。また源経信の、

あらをだにほそたにがはをまかすればひくしめなはにもりつつぞゆく

(金葉集・春・七三)

の歌の「まかす」は、「水を引く」意だけで、掛詞となっていないが、そのかわり、第五句の「もり」が「漏り」と「守る」を掛ける。

この歌にみえる「まかす」と「もる」との対応関係は、経信自身、すむ人もあるかなきかのやどならしあしまの月のもるにまかせて

(新古今集・雑上・一五三〇)

と、月光とのかかわりで「もる」に「漏る」「守る」を掛けた「もるにまかせる」という措辞を発生させ、やがて、

あふさかのせきのすぎはらしたはれて月のもるにぞまかせたりける

(詞花集・雑上・大藏卿匡房・三〇七)

いなば吹く風にまかせてすむいほは月ぞまことにりあかしける

(新古今集・秋上・皇太后宮大夫俊成女・四二八)

といった和歌に影響を与えることとなる。また、「任す」は詠歌主体の「身」と「心」の関係を凝視した歌にも使用される。増基法師の、

ともすればよもの山べにあくがれし心に身をもまかせつるかな

(後拾遺集・雑三・一〇二〇)

の歌は、山辺にあこがれる心に身を任せたことにより、出家に際しての決意表明を、紫式部の、

かずならで心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり

(千載集・雑中・一〇九六)

の歌は、逆に身に從ってしまう心を詠じ、自己の意志に反し、境遇に押し流さ

れて行く我が身の不如意なさまを嘆息している。

このほか、「任す」を取り込んだものに、次のような「駒にまかす」という一連の歌がある。

ゆふやみは道も見えねど旧里は本こし駒にまかせてぞくる

(後撰集・恋五・よみ人しらず・九七八)

あしのやのこやのわたりにひはくれぬいづちゆくらんこまにまかせて

(後拾遺集・羈旅・能因法師・五〇七)

みやこのみかへりみられてあづまちをこまの心にまかせてぞゆく

(後拾遺集・羈旅・増基法師・五〇八)

これらはいずれも「韓非子」(説林上)にみえる「老馬之智可用也。乃放老馬而隨之、遂得道」の故事を背景とするが、能因や増基の歌には詠歌主体の遁世、漂泊のイメージが鮮明である。また、「まかせてぞくる」「まかせてぞゆく」の措辞は、「まかす」を「ぞ」の係助詞で強調する点、ここで問題としている「まかせてぞみる」系列の措辞とみなしてよい。

以上、「まかす」を使用する和歌の発想を、八代集を中心に検討してきた。他にも若干の異相もあるが、このあたりで留めたい。

ここで引用した和歌の発想は、次に吟味を加える「まかせてぞみる」の措辞を有する歌と脈絡を持っているものも少なくない。

これらのうち、作中人物の田園趣味、自然との融和、あるいは隠逸志向との関連で、特に留意すべきものは、「和漢朗詠集」の「田家」の項に引用の、田作りは人に任せ、専ら花に眺め入る歌とか、住居や閑屋に月が洩れてくるのに任せる歌、我が身を心や駒の行くのに任せるといった一連の歌である。

三

ここで漸く「まかせてぞみる」の措辞の系譜に触れる段階になった。

「まかす」を係助詞「ぞ」で受けて強調する措辞には、「まかせてぞみる」のほか、「まかせてぞきく」「まかせてぞゆく」「まかせてぞひく」「まかせてぞやる」といった類似のものがある。ここでは、これらの措辞も一連のものとして認

定し、「まかせてぞみる」系列の措辞として一括して調査対象とする。「まかせてぞみる」の措辞の早い用例は、次の兼盛や能宣あたりの歌であるうか。

すすきある所にとこきたり

こぬ人をよびにはやらす我がやどはまねく尾花にまかせてぞみる

(兼盛集・一八六)

かはらにまかりありくに、ふかきののなかに、ぬまのほどにて

まきもおふるなつのぬまのうきぬなはくる人なみにまかせてぞみる

(能宣集・三六一)

兼盛歌は、詞書と分離すると、自分の宿にやって来ない人を敢えて呼びにやらす、ただ尾花の招くのに任せてみるとなり、人が訪れない閑居のさまにもとれるが、詞書によると薄のある所に男が来ている屏風絵を見ての詠歌とみなされるので、尾花が人を招き寄せたとみなしたところに趣向をもたせたのであるう。

一方、能宣歌は、「うきぬなは(浮蕙)」の関連で「くるひと」に「来る」と「繰る」を掛けている。その点、この両首は「まかせてぞみる」の行為の背景に「こぬ人」「来る人なみ」と人間の存在の有無の問題も込めている。

そこにはまだ作中人物の閑居、あるいは隠遁的な心の潜在を読みとることはできないが、次のような歌と脈絡をもつてくることは留意してよい。

いへのさくらのちりてみづにながるをよめる
ここにこぬ人もみよとてさくらばな水の心にまかせてぞやる

(後拾遺集・春下・大江嘉言・一四五)

梅花招客

君ませといひにはやらで梅がかを風のたよりにまかせてぞみる

(長方集・一八)

二月つごもりがたに、ものいふ人のもとに、
〔とふ〕人もなきわがやどのさくらばなかせのこころにまかせてぞみる

(道濟集・一三三)

九月つごもりのひ

をしめどもすぎゆく秋はをれかへりまねくをばなにまかせてぞ見る

(肥後集・二二四)

最初の嘉言の歌は「嘉言集」(二二五)にもみえ、第五句が「まかせてぞみる」となっている。自宅に咲く桜を見に来ない人に、散った花びらを水に任せて下流に流す作中主体の心には、その川面の花びらを見て、人の訪れることを希求する思惑もあろう。同様に長方歌は、歌題「梅花招客」から判断しても、梅香を

風に任せて遣ったことで、呼びに遣らなくても、人の訪れを期待している心情が明瞭である。道済歌も一首独立すると、自分の家の桜花を、散らうと散るまいと、すべて風に任せて見ているという諦観的な心もあるが、詞書の「ものいふ人のもとに」からみて贈歌なので、やはり人の訪れをかすかに望んでいる。最後の肥後歌の下旬は、先掲の兼盛歌と全く一致する。が、この方は人の訪れではなく、「九月つごもりのひ」の詞書からみて、去り行く秋への惜別の情である。

以上列挙した歌には、任せるものを風や水や尾花に向けているが、そこに「我が宿」に來ない人を人為的に強く呼び寄せたのではなく、自然の現象に任せ、静かに來訪を待つ心、あるいは去り行く季節を自然とともに惜別する心情などが背後に揺曳している。その心のありようは、隠遁的な精神に強く裏打ちされたものではないが、どこか遠くでそれと共鳴するものを含み込んでいるのではなからうか。

一方、「まかせてぞみる」系列の措辞の歌には、次のように、人間の意志や営為を超越した神仏に任せるというものがある。

かすが山ふもとのをのにねのびしてかごとをかみにまかせてぞみる

(散木奇歌集・二二)

いつはりのちかひならねば君が代をおほたらしめにまかせてぞみる

(散木奇歌集・八四八)

なにしおへばうき世の人のいつはりをただすの宮にまかせてぞみる

(拾玉集・三三八六四)

またたのむかたこそなけれ世の中よたのめば神にまかせてぞみる

(拾玉集・二二六四五)

これらは、人間界の種々な俗事、あるいはそれを包み込んだ世間の行末を、すべて神仏に任せることにより、強い信仰心の表白をも企図している。

また、「まかす」に「水を引く」意を掛けた歌のあることは、単独で「まかす」を使用した歌の考察のところでも触れたが、「まかせてぞみる」系列の歌でも、その種の発想歌は次のように散見される。

たねまけるなはしろみづをせきあげてとみたの里にまかせてぞみる

(経衡集・九六)

わがやどのかどたの早苗うゑしよりいさらをがはをまかせてぞみる

(為忠家初度百首・忠成・一九六)

しづのをがなはしろ水もひきやらでふるはるさめにまかせてぞみる

(閑谷集・一〇七)

山ざとは籬のを田の苗代にかけひの水をまかせてぞみる

(壬二集・一一五)

小山田のなはしろ水もせきわけずゆたかなる世にまかせてぞみる

(新千載集・春下・前大納言為世・一二二)

ここに列挙した歌は、いずれも山田の「苗代」や「早苗」が素材となり、「まかせてぞみる」に「水を引く」意が込められているとみなしてよい。ただし、「任せてぞ見る」の意が中心で、「水を引く」意は縁語的に付加しただけのものや、逆に「水を引く」意の方が主意になっているものもあり、必ずしも一様ではない。作中主体も農夫の立場で詠歌したもの、農夫の行為を別の視点から客観的に描写したものなどの振幅がある。

この他、「まかせてぞみる」系列の歌には、ここで中心的に取り扱いたい作中人物の隠逸的な心のありようを明確に詠じたものも少なくないが、その例歌は後に一括して取り上げることとし、あと一つ「柳」を素材にしたものが幾首か散見されるので、それに言及しておきたい。

やなぎいけのみづをはらふといふ心をよめる

いけみづのみくさもとらであをやぎのはらふしづえにまかせてぞみる

(後拾遺集・春上・藤原経衡・七五)

あらし吹くきしの柳のいなむしろおりしく浪にまかせてぞみる

(新古今集・春上・崇徳院・七一)

さほ姫の柳のえだにひく糸を吹来る風にまかせてぞ見る

(久安百首・実清・七一〇)

これらの歌は「柳」を取り込んでいるが、柳は枝が細く垂れているので、それを糸や箒に比喩している。

最初の経衡歌は、柳の下枝を箒のように見立てた趣向を、次の崇徳院の歌は、嵐が吹きつける水に浸った柳の下枝を浪に任せて機を織るさまにみなしている。最後の実清歌の、柳の糸を風の吹くのに任せているのも「さほ姫」との関連で機を織る発想とかかわらせている。

以上のように、「柳」を取り込んだ「まかせてぞみる」系列の歌は、まさに、風に吹かれる柳の下枝を糸や箒に見立てるところに興味を見出しており、人為

的な行為と自然に任せることとの対応関係は、それほど顕著に表面化していない。

四

「まかせてぞみる」系列の措辞には、自分では敢えて手を出さず、自然の現象に任せてみるという意も包み込まれている。それは同時に、この措辞を取り込む際に、作中人物に無為自然といった精神の持主を登場させることにも通う。

山田の引板に手をかけないで、吹く秋風に任せてみるという源頼家の歌の作中人物には、そういった心も付与されているのではないかとすることは、この論考の劈頭で推論したところである。

ただ、頼家歌やその影響下になつた歌には、必ずしも、そういった心情が明確化されていないし、「まかせてぞみる」系列の歌の作中人物が、すべてそのような心情を有するわけではなく、すでに例歌を挙げて検討したように、種々な様相がみてとれるのである。

そこで、ここでは、作者が作中人物に隠遁的な心情、あるいはそれを取りまく境遇に閑居の雰囲気鮮明にしている歌を対象に取り上げ、「まかせてぞみる」系列の措辞を有する歌の一面をとらえかえしてみたい。

作中人物を隠遁者と想定していると思われる歌で、何に「任せる」のかの視点からすると、それは「風」や「嵐」である。ただ「任せる」対象は、桜や紅葉といった美的なものではなく、落葉や草庵に変わっていることが留意される。例えば、「高遠集」の次の歌などは、その種の歌の先蹤とみなしてよい。

宮葉満階紅不掃

おちつもる木のは木のははおのづからあらしのかぜにまかせてぞみる

(二八五)

この歌の句題は、白楽天の「長恨歌」から「あはれなる事」に着目して選択した詩句である。この漢詩の場面は、宮殿の階に降り積っている落葉を誰も掃きとるものもない寂寥さを描いているが、和歌の世界では、その落葉を風が吹き払うのに任せたままにしている状況に展開させている。従って作中人物が隠遁者ということにはならないが、発想としては、次のような歌に脈絡をもってくる。

山家

木・葉のみちりつもりぬる柴の庵は嶺の嵐にまかせてぞみる

(堀河百首・河内・一五〇四)

この歌は「山家」という歌題、「柴の庵」からみて、作中人物は草庵に籠る隠遁者である。一首の歌から、庵室の屋根や庭に降り積つた落葉を風が吹き払うのに任せたり、その寂々たる音や動きを見聞きしている人物の姿態や心情が透視されてくる。

嵐

くる人もなきあしのやの柴の戸はみねの嵐にまかせてぞみる

(永久百首・仲実・二六八)

この歌の下旬は、先の「堀河百首」の歌と一致するが、嵐の吹くのに任せている対象を「柴の戸」に変奏し、「くる人(来る人)」の「くる」を「戸」の縁語とする。誰一人訪れる者もない芦の屋、その粗末な扉を嵐の吹くのに任すことは、あたかも人が来たかのように戸が開閉されることにもなる。そこに隠遁者としての孤寂な心境も浮上してくる。

山家夕

くれぬとて峰よりおろす山かぜに竹のさけとをまかせてぞみる

(宗良親王千首・八七五)

の歌は、第四句の本文に不審があるものの、歌題「山家夕」からみても、作中人物は隠遁者である。

また、落葉を風や嵐に任せるといふ、
もみぢばに秋よりかねて村時雨今はあらしにまかせてぞみる

(拾玉集・三二二三)

はかなさの命にまさる紅葉を今年も風にまかせてぞみる

(竹風和歌抄・九六二)

などの歌の作中人物も同様に形象化されているとみなしてよい。
さらに、

木のはかくひともなければ山ざとにははあらしにまかせてぞみる

(忠盛集・五三)

おのづからはらふ人なき古郷の庭はあらしにまかせてぞみる

(続千載集・雑中・広義門院・一八三〇)

の両歌は、下旬が全く一致するだけでなく、払う人のいない庭に積つた落葉を

対象とするなど、酷似した発想を駆使する。ともに嵐に落葉が吹き払われるのに任せたまま、じっと庭を眺める隠遁者の孤独な面影が鮮明である。

次の為家の、

うちたえて人もはらはぬわがいはほはなびくやなぎにまかせてぞみる

(為家千首・七八)

の歌は、嵐ではなく柳に払わせているが、これは先掲の「後拾遺集」の柳を箒に見立てた経衡歌の発想などを撰取したものである。

このように「まかせてぞみる」系列の措辞を撰取した歌の系譜を辿つてくると、作中人物を隠遁者に明確に造型した歌は、どうやら「堀河百首」の頃から散見され始めるが、次の歌も「堀河百首」の歌である。

山家

日ぐらしの声ばかりする柴の戸は入日のさすにまかせてぞみる

(堀河百首・顕季・一四九三)

この歌は「金葉集」(雑上・二三九)にも入集するが、「さす」に「射す」と「鎖す」を掛ける修辭を駆使している。「山家」の歌題からみて、山里の柴の庵で、人の訪れもないまま、日ぐらしの声や夕日を眺めている孤独な人物の心が背後に揺曳している。

以上、若干のコメントを加えながら列挙した「まかせてぞみる」系列の和歌の作中人物は、隠逸的な精神の持主であることが、かなり明確に造型されるとみなされる。

最後に、任せてみる行為をとる作中人物が、果して隠逸的な精神状況にあるかどうか、判断にゆれのあるものとして、「心」に「まかせてぞみる」系列の歌を吟味する。

「心にまかせてぞみる」の歌には、すでに「水の心にまかせてぞ見る」とか「風の心にまかせてぞ見る」の所でも触れたが、そこでの「心」は作中人物自身「心」ではなかった。ここで問題にするのは、次の例歌のように作中人物の「心」のケースである。

聖護院二品親王家五十首、見花

をしからぬ身をいたづらに捨てしより花はこころにまかせてぞみる

(草庵集・一五五)

この歌は「頓阿五十首」(八)から採歌したもので、相互に異文関係はない。

出家してから、なぜ花を心に任せて見るようになったというのであろうか。その点に關し、「草庵集蒙求諺解」は「捨はて、用なき身にてあれば、心にまかせて毎日所々の花をみる也。心に一點の塵なく、花にのみ身をなす事殊勝なり」と解釈する。即ち、出家して俗事にかかわる多忙さから逃れ、時間的な余裕が出来たので、毎日、花を心ゆくまで見ることが可能になったためとする。が、主眼はそこにはなく、むしろ、「諺解」が次に解説するように、出家によって、心が清澄になり、花と一如となって眺めうる諦觀的な心の獲得を詠じているのではなからうか。勿論、作中人物は遁世者である。

次の俊成の歌はどうであろうか。

家に十首歌よみ侍りけるに月を

世をうしとなに思ひけん秋ごとに月は心にまかせてぞ見る

(玉葉集・秋下・皇太后宮大夫俊成・六九三)

この歌は「長秋詠藻」(二二五)からの採歌で、相互に異文はない。これまで世の中を憂く辛いと思つて来た過去の自身の心情に不審を提示、今は秋が来るごとに月を心のままに見ることの出来る感慨を詠じているが、なぜ、そのような心境になったのかは、先の頓阿の歌のように明示されていない。その点について『玉葉和歌集全注釈』(岩佐美代子著)は、「この世を辛い、いやだと、一体何で思つたりしたのだろう。生きていけばこそ、秋ごとに月を心のままに見ることもできるといふものではないか」(傍点稲田)と解釈している。即ち、外部事情でなく生命の尊さの確認に求めている。これに対し川村晃生氏は「上句の不遇感と下句の満足感からして、任官時などの折の詠か」(和歌文学大系『長秋詠藻』校注)と外部事情によるかと推測する。

確かにこの歌は、理解が分れるように、心境の変化の原因が一首のうちに明示されず曖昧である。が、これまで辿ってきた「まかせてぞみる」系列の和歌の発想や、「長秋詠藻」で、この歌が「山居月」「田家月」といった遁世者が月を見る発想歌の次に配列されていることなども考慮すると、作中人物が、月を「心にまかせてぞ見る」ようになったのは、漸く隠逸的な精神を深化させていったためという理解も出来るのではなからうか(俊成が実際にこの時出家していたかどうかは別として)。

俊成歌の下句と全く一致する二条良基の次の歌もある。

おもひいでるのなきにはなさじ雲の上の月はこころにまかせてぞみる

(後普光園院百首・四五)

この歌は、後に「延文百首」(一〇四六)に繰り入れられ、上句を「おもひ出でのなしとはいはじ」と改作している。これも、なぜ月を心に任せて見るのか、作中人物の心境は曖昧である。「雲の上の月」が禁裏・仙洞の月をも指すことから、「寵臣・撰閲家としての得意の情の作か」と推測するむきもある。

この良基歌から連想されるのは、西行の次の歌である。

大みねのしんせんと申す所にて、月をみてよみける

ふかき山にすみける月を見ざりせば思出もなき我が身ならまし

(山家集・一一〇四)

良基の歌の作中人物は、出家して深山に籠つてはいないが、この禁中の雲の上の月を心ゆくまで見ることに、それを現世の思い出しにしたいという心がみてとれるのではないか。上句には、そのような状況に容易にならない紊乱の世に対する焦燥感が、下句には冴えわたる月光と一如となり、清澄な心となることを希求しているとも解される。

この、「まかせてぞみる」の系列の歌は、措辞は同じでも、これまで例示してきたもののように、自身の外部にある自然のなすがままに任せてみようとするものと、必ずしも同発想ではないので、このように、対象を任せてみる作中人物の心境に到ったプロセスを巡り、いささか曖昧さが生ずるのである。

そもそも、人為的な行為を敢えて抑え、自然のなすがままにまかす「任」の世界は、漢詩文にも散見される。ここで、その多くの用例を列挙する余裕はないが、例えば、和歌にも甚大な影響を与えた「和漢朗詠集」の漢詩文にも、次の用例がある。

織自何絲唯暮雨 裁無定様任春風

(巻上・花・萱三首)

錢塘去國三千里 一道風光任意看

(巻下・慶賀・七六七)

前者の「春の風に任せたり」は、「まかせてぞみる」系列の和歌に圧倒的に多かった、風や嵐の吹くのに任せるのに、また、後者の「意に任せて看る」も、先述の「心にまかせてぞ見る」に、各々通うものがある。

「まかせてぞみる」の措辞形成に、こういった漢詩文との影響関係を想定し、てよいかもしれないし、深い水脈では、中国の隱逸思想や無為自然の精神と脈絡を有するであろう。

以前、中世和歌にみえる「軒端の山」という措辞に着目し、そこに中世歌人による隱遁的措辞の形成過程とその意味を考察したことがあった。¹⁸⁾この「軒端の山」とは、山が住居の近くに接近している環境を凝縮した措辞であること、それが大枠としては、山里、深山に場所を占める住居と、そこに住む人物の隱遁的心情をも象徴する措辞となっていることを論及した。換言すれば、「軒端の山」系列の措辞は、隱遁、閑居生活を希求する歌人達が、短詩型文学の宿命と格闘しながら形成された措辞であった。

これに対し、ここで対象にした「まかせてぞみる」系列の措辞は、必ずしも形成当初から作中人物の隱遁的行為や精神を象徴するものとして提示されていたわけではなかった。

後拾遺集時代の歌人の歌のなかには、そういった心情を背後に潜在させたものもあつたが、「まかせてぞみる」系列の歌の発想は、分析してきたように、多様な様相を呈していた。

そして、漸く「堀河百首」の頃になると、「山家」という歌題歌のなかに、この措辞が撰取され、作中人物の隱遁的行為と明確に関連して詠出された歌が登場してくる。

そこには、「まかせてぞみる」という措辞自体に内在する、自分は手を出さず、自然の現象に任せてみるという一面に、隱遁的な行為・精神に通うものを感知し、それを隱遁者を作中人物とする和歌に撰取していったという経緯が透視できる。

「まかせてぞみる」系列の措辞は、早くは兼盛や能宣の和歌に見え、やがて「後拾遺集」時代の歌人間に流行をみせ、多様な振幅を伴いながら、院政期、鎌倉時代の和歌にも散見される。

けれども、室町時代になると、一万一千余首の歴大な家集「草根集」に「まかせてぞみる」の措辞が一首もみえないことが象徴するように、漸次、減少してゆく。

勿論、皆無というわけではなく、室町期でも、
山里はつくらぬ庭の滝殿を岩ねの水にまかせてぞ見る

(卑懷集・六一四)

谷の戸のなかばは雲をあるじにてとちはつるをもまかせてぞみる

(雪玉集・三〇三五)

と基綱や実隆の歌などに残存している。この両歌はともに作中人物を隠遁・閑居の人として設定しているように、「まかせてぞみる」の措辞も、その表象性を増している。これは同時に、この措辞がもはや歌人間に新鮮な感懐をもって受けとめられず、やや形骸化してきたことを示唆しているようにも思われる。

〔注〕

(1) 『新編国歌大観』による。以下、特記しない和歌本文と歌番号は同書による。

(2) 『私家集大成』所収本による。歌番号も同書による。

(3) 『新古今和歌集全評釈』。

(4) 『後拾遺和歌集新釈』(犬養廉・平野由紀子・いさら会著)

(5) この注釈書の出版以前に、川村晃生氏も『後拾遺和歌集』(和泉古典叢書)で、頼家の下句が「当時流行の詠風」であったこと、この措辞は『兼盛集』あたりが古いこと、および頼家歌の模倣歌二首も補注で指摘している。

(6) 川村晃生著『撰定期和歌史の研究』の第二章第二節五の「新風への道」、柏木由夫氏「後拾遺和歌集」(和歌文学講座、第五卷『王朝の和歌』所収)、高重久美氏「落葉」の音源頼実の歌を通して——(『文学史研究』39、一九九八年十二月)など参照。

(7) 新潮日本古典集成『方丈記・発心集』(三木紀人校注)。

(8) 石田吉貞著『新古今和歌集全註解』。

(9) 注(3)に同じ。

(10) 「取り委する」(巻二・二二三)と複合動詞として一首みえるが、任せる意ではない。

(11) 因みに「拾遺集」(雑下・東三条太政大臣・五七四)の長歌「を山田を人にまかせて 我はただ たもとそほつに 身をなして…」も、「まかせて」に「水を引く」意を縁語としている。

(12) 新釈漢文大系『韓非子上』による。

(13) 『新編国歌大観』は、歌本文を「こぬ人をよひには」とするが「よび」と濁点を付すべきではなからうか。ここは「よび」として引用した。

(14) 『新編国歌大観』所収の歌の初句は「いふ人も」とあるが、紙撚切を参照して「とふ人も」として引用した。

(15) 『草庵集蒙求諺解 本文と索引』(笹川祥生・上野洋三編)による。

(16) 新日本古典文学大系『中世和歌集 室町篇』所収「後普光園院殿御百首」(伊藤敬校注)による。

(17) 日本古典文学大系『和漢朗詠集』(川口久雄校注)による。

(18) 拙稿「『軒端の山』考—中世和歌の隠遁的措辞の形成—」(国語国文、平成十二年八月)。